

## 令和6年度 第2回 やさしさの連鎖会議（会議録）

日 時：令和7年2月6日（木）14:00～17:00

場 所：KOSUGI 1 イベントスペース（川崎市中原区小杉町1丁目403-53）

出席者：田中委員、中村委員、高木委員、岡本委員、近内委員、丸子委員、成澤委員、  
ストウ委員、今村委員

欠席者：成田委員

傍聴者：なし

### <会議内容>

#### 開会 事務局

「寛容なまち」の実現に向け改めて「心のバリアフリー」を地域に根付かせる重要性や市民参加型の取組の重要性について触れ、具体的には第1回の会議で作成された「みらい新聞」を基にして、委員同士の活発な対話でさらに話を広げ、それぞれの専門性を掛け合わせたユニークで具体的なアイデアが生まれることを期待する。

#### アイスブレイク ストウ委員

彫刻と呼ばれる身体ワークを行った。同じ活動であっても関係人数が増えることで関わり合いの余白が増えて緊張がとけ、ひとりでは思いつかない発想ができることを実感として感じられるアイスブレイクワークを参加者全員で実施した。

#### 対話ワーク みらいの「寛容なまち川崎」に必要なアクションを考える

3つのグループ（メインテーブルGr、白壁Gr、芝生部屋Gr）に分かれ、3回の対話セッションを行った。3つのグループには対話の起点となる「みらい新聞」を3枚ずつ配置し、最初のセッションではその新聞の作者である委員がどういう想いでその「みらい新聞」を書いたのかが話され、各テーブルに付いたファシリテーター（事務局）がそこから派生した意見やアイデアを引き出す形で進行をし、次々と委員から出るコメントやアイデアを付箋にメモする形で新聞の周囲に広げていった。全委員が全テーブル・全新聞を周れるようにセッションごとに入れ替わる形式で進行した。

#### 具体的な対話内容（グループ1: メインテーブル）：

このグループでは、「サスティナビリティ音楽ライブコミュニティ！！」「食いっぱぐれないまち川崎」「バーチャル自分でまちへの要望、他者への想像」というタイトルのみらい新聞が起点となり、主に「音楽、食、デジタル化を通じた地域活性化」

についての話題を中心に議論が展開された。「かわさき親戚」という緩やかな地域の関係性をつくるアイデアや、食と音楽を組み合わせたアイデアについて話が盛り上がり、他の地域で開催されたというアイスクリームに特化したイベントの成功事例から、嗜好品が持つ人々をつなぐ力を活用してバリアフリーなどのイベントに意識の高い層だけでなく幅広い人々を引き込む工夫ができるのではないかといったアイデアも話された。全体として、川崎市ならではの「70点主義」や「ユーモア」を活用した柔軟な取組が、市民の参加意欲を喚起する鍵なのではという対話が、3セッションを通じて広がった。

#### **具体的な対話内容（グループ2: 白壁）：**

このグループでは、「不便を愛でるー100カ所のたき火オープン」「脱スマートシティ環境変容・行動変容が意識変容につながって実現した世界初の“寛容なまち”」「駅前の一軒のライトが照らすのは未来のインクルーシブな川崎市の姿？」というタイトルのみらい新聞が起点となり話を展開した。例えば、特別支援学校に通う子どもたちが障害者雇用で働く人の家に泊まり生活や仕事を体験する「ダイバーシティホームステイ」というアイデアや、やさしい街には余剰部分（ムダ）が必要という話題からは余剰の中で生まれる対話や交流をさりげなくコントロールする「ソーシャルマドラー」といった役割のアイデア、また「知っている子どもの泣き声はうるさくない」という話題から避難所体験イベントを通じて顔見知りの関係を築き、助け合いを促進する「地域防災イベント」のアイデアなどが議論され、ユニークなサードプレイスの必要性やアプローチについての対話が、3セッションを通じて広がった。

#### **具体的な対話内容（グループ3: 芝生部屋）：**

このグループでは、「DE&Iでがっばり幸福度日本一になりました」「2050年見守り隊多摩区西生田商盛会」「解決！！おとなりさんの困りごと」というタイトルのみらい新聞が起点となり、やさしさを連鎖させたいがやさしさ自体では稼げない・持続しないというジレンマから、これらを軸にどう他の稼ぐことにつなげられるか？という視点で地域社会にDE&Iが浸透するための施策についての議論が多くでた。他地域での隣人支援の実例（醤油の貸し借りや犬の預かり）を参考に、160万人の市民による320万通りの横つながりの支援の可能性が川崎市にはあるという話題から、様々な働き方・考え方の人たちが活躍できたり繋がれる独自の「DE&I川崎モデル」が作れるのではないかと話された。具体的な施策案として「ウェルカム掲示板」の設置や、防災支援にもつながるもしもの時だけでなくいつも使える「シェア倉庫」などの案が出され、禁止事項だけではない活動を歓迎したり、空きスペースをわざわざ明示・作成することで市民の参加をゆるく促すアイデアに注目が集まった。

## 一緒にやろう！宣言ワーク

これまでの対話セッションでの内容から、各委員が今後川崎市で是非やってみたい、と感じるアイデアや話題に「一緒にやろう！」シールを貼り、「自分たちがやるなら誰とどう広げたいか」について、具体的な内容をワークシートに記載したあと各委員から発表した。

以下、発表アイデアから一部を紹介する。

- 非日常で多様に触れて自己肯定感をゲットする施策（非日常・防災・晴れ舞台・全く知らない人と触れ会える The Fifth プレイス、多様な文化・慣習と接触できる場所）
- ウェルカム掲示板（例：子どもがボール遊びできる公園、大声が出せる場所、問題が起これば対話ではなく敢えてジャンケンで決めるなどユニークなルールでゆるさを埋め込むなど）
- いいことあったら倍お金を払う癒しの寄付
- ダイバーシティホームステイ（例：市内障害者の自宅に子どもがホームステイをするなど）
- コの字型カウンター（カウンターの中に入ったりでたりが自由なバー型の交流の仕組み）
- 防災イベント・子ども食堂・ストリート音楽会・ダンス発表会、が横連携（固まったコミュニティ内ではない、ふらっと参加できるサードプレイス的な場所をたくさんつくる）
- 非合理性と非生産性をまちに埋め込む（例：アートをたくさん配置する、税理士相談会を無駄にオシャレに開催する、真面目を不真面目にやる、など）
- 食のユニバーサルデザインを通じてつくる自殺の少ないまち（顔が見える関係性づくり）
- 川崎100人図鑑の続き not意識高い系としての「下の上100人図鑑」（川崎はガラは悪いけどタチは悪くない、40点でいい寛容な社会を表す図鑑）
- 不便を楽しむ避難所生活体験イベント など

## クロージング・挨拶 事務局

3時間にわたる会議を振り返り「単なる議論を超えて、委員の多様な視点が交錯する瞬間が本当に面白かった」と感謝した。特に、特別支援学校の子どもと障害者雇用の現場をつなぐアイデアや、気軽に集える場づくりなどのアイデアについては、実現にはハードルもあるが新鮮な視点もあった。今後は事務局で内容を精査した上で、次回の会議や市民参加型のイベントやワークショップなどにこれらのアイデアを活用し、市民が「自分ごと」として触れられる形に展開していきたい。次回の会議開催は事前に調整する。「今日が終わりではなく、むしろ始まり」とし、継続的な協力を委員に呼びかけた。

## 閉会

以上